

琉球大学医学部新任教授記念講演会

副会長 稲田 隆司



去る2月27日（木）、本会館にて琉球大学医学部新任教授記念講演会を開催したので報告する。

本会と琉球大学の関わりは長く、昭和59年より琉球大学医学部の先生方に理事としてご就任頂き、琉球大学と沖縄県医師会のパイプ役として重要な役割を担って頂いている。

本会としても本県の医療界全体の発展のために琉球大学医学部と本会の更なる緊密な連携は不可欠であると認識しており、新たに教授としてご就任された先生方と本会会員との親睦を図るため、講演会並びに懇親会を開催した。

今回は、古川浩二郎教授（胸部心臓血管外科学講座）、山本和子教授（感染症・呼吸器・消化器内科学講座）、梅村武寛教授（救急医学講座）のお三方をお招きし、会員との親睦を深めた。

記念講演会では、古川教授より「琉球大学心臓血管外科の使命」、山本教授より「琉球から

感染症・呼吸器・消化器内科学の発展に貢献する教室へ」、梅村教授より「沖縄の救急医療を破綻させないために～新しい琉球大学病院救命センターの果たす役割～」と題し、講座の特徴や研究内容についてご説明頂いた。

その後、会場を移して先生方を囲んでの懇親会が開催され、祝宴が和やかに行われた。



懇親会

講演

①「琉球大学 心臓血管外科の使命」



琉球大学大学院医学研究科 胸部心臓血管外科学講座
教授 古川浩二郎 先生

琉球大学は、県内唯一の大学および大学病院として診療、研究、教育に関して、沖縄の医療を牽引していく必要があると考えます。

診療：一般病院で行うことが困難であろう琉球大学心臓血管外科で行うべき手術は、高難度手術（自己弁温存、心筋症に対する心筋切除術、重症心不全に対する人工心臓治療）と低侵襲手術（小切開心臓手術、カテーテル治療）です。カテーテル治療の一つに経カテーテル大動脈弁移植術（TAVI）があり、2014年から循環器内科と胸部心臓血管外科で琉球大学ハートチームを結成し、これまで600例以上のTAVIを行って参りました。多くが高齢・ハイリスクな患者さんでありましたが、極めて良好な成績を達成しています。また、安全性を重視し、質の高い小切開心臓手術にも積極的に取り組んでおり大学ならではの綿密な計画のもと行っています。近い将来にはロボット手術も導入して参ります。

研究：動脈硬化が原因である下肢の慢性閉塞性動脈硬化症に対しては、通常カテーテル治療、バイパス手術が行われますが、動脈病変が高度な患者さんの中には従来の治療が困難で下肢切断に至る方がおられます。かかる治療困難な患者さんに対する再生医療による治療法が開発さ

れつつあります。既に市販されている薬剤もありますが、琉球大学では脂肪由来間葉系細胞を使用した医師主導治験（第1相治験）を行っています。これまで治療法がなかった患者さんに対する新しい治療法の開発を行っています。また、広範囲の胸腹部大動脈置換術後の虚血性脊髄障害は世界的にも解決されていない課題ですが、かかる病態を動物実験にて再現し、それに対する脂肪幹細胞の脊髄軟膜下投与の効果を琉球大学麻酔科・形成外科の先生方と協働して検証しています。小動物実験レベルでは良好な結果が得られています。

教育：琉球大学胸部心臓血管外科では、将来の沖縄の外科医療を担う若手の教育にも注力しています。医学部3年時には、医科学研究として3ヶ月間、各研究室に配属されます。琉球大学胸部心臓血管外科では、その成果を学内だけでなく学外での学会発表に繋げています。2021年には葛原 怜 君が学生 Award 最優秀賞を獲得しました。また、初期研修として胸部心臓血管外科を研修した研修医には症例報告として学会発表をしてもらっています。2022年の日本循環器学会九州地方会にて琉球大学研修医の城間 恵介君が、研修医部門優秀賞を受賞しました。これらの若い人の経験は、われわれの行っている外科学の魅力の発信となり他の同年代の若手への刺激にもなるので、これからも積極的に行っていきます。

地域医療：先日、第2期循環器病対策推進基本計画が発表され、その全体目標は「2040年までに3年以上の健康寿命の延伸及び循環器病の年齢調整死亡率の減少」と掲げられています。その目標達成のために、多数の施策が掲げられていますが、その根幹は琉球大学と地域の先生方との風通しの良い関係であろうと思います。これからも地域の先生方との協働体制を重視して参ります。

PROFILE

学歴

昭和 57 年 3 月 福岡県立修猷館高校卒業
昭和 57 年 4 月 佐賀医科大学医学部医学科入学
昭和 63 年 3 月 佐賀医科大学医学部医学科卒業

職歴

昭和 63 年 6 月 佐賀医科大学医学部外科医員
平成 元 年 9 月 福岡徳洲会病院心臓血管外科医師
平成 3 年 6 月 古賀病院心臓血管外科医師
平成 5 年 12 月 佐賀医科大学医学部附属病院胸部外科助手
平成 8 年 1 月 佐賀県立病院好生館循環器科医師
平成 10 年 7 月 佐賀県立病院好生館心臓血管外科医長
平成 12 年 4 月 佐賀医科大学医学部外科学助手
平成 15 年 7 月 ベイラー医科大学（アメリカ、ヒューストン）研究員
（文部科学省在外研究員）
平成 16 年 6 月 佐賀大学医学部外科学助手
平成 18 年 3 月 佐賀大学医学部附属病院心臓血管外科講師
平成 23 年 4 月 佐賀大学医学部胸部・心臓血管外科准教授
平成 29 年 9 月 九州医療センター心臓血管外科部長
平成 30 年 8 月 九州医療センター循環器センター統括運営部長
令和 2 年 9 月 琉球大学胸部心臓血管外科教授

②「琉球から感染症・呼吸器・消化器内科学の発展に貢献する教室へ」



琉球大学大学院医学研究科
感染症・呼吸器・消化器内科学講座
山本 和子 先生

沖縄県医師会の先生方には日頃より大変お世話になっております。私が琉球大学に着任して、早くも2年と4ヶ月が経過しました。本日の貴重な機会を通じて、これまで行なってきたこと、これから着手したいことを、お話申し上げます。

診療：大学病院として強化すべきはがん診療の高度先進化です。早期診断と内視鏡治療、進歩著しい抗がん化学療法について、高度先進医療を提供しなければなりません。沖縄県はがん薬物療法専門医が全国で最も少なく人材育成

が肝となりますが、当講座より消化器内科医2名、呼吸器内科医1名を国内有数のがん診療連携拠点病院に数年間の研修に出し、彼らが来年度帰ってきます。専門医を取得し、消化器・呼吸器がん診療の中心的存在になってくれると期待しています。さらに呼吸器・消化器内科ともに精度の高い検査・処置を行うための新しい内視鏡デバイス（クライオバイオプシーなど）の県内初の導入を近い将来目指します。また、県内で唯一の肝移植施設として、年々増加する移植患者数の術前術後を支える診療を行っています。第1種、2種病床を有しエイズ中核拠点病院であることから、新興感染症及びHIV診療の県内診療・教育を担います。

研究：沖縄県の特徴を活かした研究を進めています。特有の微生物、感染流行パターンなど分子学的、疫学的な研究成果を着実に積み重ねています。着任後、13本の原著論文、9本の症例報告を発表し、国内学会・財団より13名が学術賞を受賞しました。競争的研究費、企業との共同研究、治験契約も増えています。2025年4月から先端医学研究センター感染症分野が立ち上がるため、学内外および産官学連携を強化して、より良い研究を発信していきたいと考えています。

教育：琉球大学第一内科では、将来の沖縄県の感染症・呼吸器・消化器内科医療を担う若手の教育に注力しています。医師となるための教育にも工夫し、さらに医学部生から研究に携わることが可能な「研究医学生」を随時募集し、現在は15名が登録し、研究の推進、学会発表や論文報告に繋がっています。また、研修医教育・リクルートとして、消化器シミュレーショントレーニング、呼吸器内科セミナーを毎年開催して魅力を伝えています。その成果が見えてきつつあり、来年度は7名の入局者が決まっています。

これからも沖縄県の内科医療を支える核となる講座を主宰する身として、誠心誠意尽くす所存です。医局の持つポテンシャルを存分に発揮するためには、沖縄県医師会の先生方のご協力が不可欠です。これからも何卒よろしくお願い申し上げます。

PROFILE

職歴

1999 年 佐賀医科大学医学部卒業 医師免許取得
 1999 年 国立国際医療センター 初期研修医
 2001 年 長崎医療センター 後期研修医
 2004 年 長崎大学大学院 臨床検査医学講座 入学
 2007 年 医学博士取得 長崎大学第二内科入局
 2009 年 長崎大学大学院 感染免疫学講座 助教
 2009 年 米国ボストン大学 博士研究員
 2013 年 長崎医療センター 呼吸器内科 医師
 2015 年 長崎大学病院 感染制御教育センター 助教
 2021 年 長崎大学病院 呼吸器内科 講師
 2022 年 現職

③「沖縄の救急医療を破綻させないために ～新しい琉球大学病院救命センターの果たす 役割～」



琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座
 梅村 武寛 先生

沖縄県の救急医療は、戦後の歴史的背景と県立中部病院で開始された医師初期研修に基づいた ER 型救急医療を提供し、それを発展・維持してきた全国的にみても稀な特徴を持っています。

また、県内の人口分布は、全国平均と比較して高齢化率が低く、若年者（小児）の割合が高いことが特徴です。

これらの特徴から、沖縄県の救急医療体制は「ワンストップセンター化」しており、時間外診療、軽症者（walk-in）の対応、高齢者医療、外傷・中毒患者の受け入れ、施設からの搬送、発熱者対応など、多岐にわたり、あらゆる

問題に対応しています。その結果、救急搬送が困難な事例（いわゆる“たらい回し”）は極めて少なく、これは誇るべき成果といえます。一方、時間外診療の割合が他県に比して突出して高く、時間外 1 次救急医療機関が存在しない唯一の県です。

この特徴を持った救急医療体制ですが、今回、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、何でも受け入れる体制が逆に患者数の急増を招き、救急医療のひっ迫と医療崩壊寸前の状況を引き起こしました。

今後、沖縄県は急速に高齢化が進行すると予測されており、現在の医療体制の維持が困難になると考えられます。救急診療においては、軽症者の割合が多く、小児医療費無料化政策や保護者の都合による時間外受診が影響し、特に就業終了後の夕方以降に救急受診が急増する傾向が見られます。

これらの状況を踏まえ、沖縄の救急医療が今後、持続可能であるための方策を検討する必要があります。本講演では、各医療機関との関わりを中心に、沖縄の救急医療体制の現状と課題について考えてみます。

PROFILE

略歴

1995 年 5 月 熊本大学医学部附属病院 臨床研修医（整形外科）
 1996 年 1 月 熊本中央病院 臨床研修医（整形外科）
 1997 年 5 月 熊本中央病院 レジデント（整形外科）
 1997 年 7 月 健康保険天草中央総合病院 医員（整形外科）
 2002 年 4 月 福岡大学病院 医員（救命救急センター）
 2002 年 10 月 福岡大学病院 助手（救命救急センター）
 2005 年 4 月 財団法人 救急振興財団 救急救命九州研修所 専任教授
 2008 年 8 月 福岡大学病院 非常勤医師（救命救急センター）
 2010 年 8 月 福岡大学病院 助教（救命救急センター）
 2011 年 4 月 福岡大学病院 講師（救命救急センター）
 2014 年 7 月 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 救命救急センター長
 2021 年 4 月 琉球大学大学院医学研究科救急医学講座 教授